



～読んで、感じて、伝えよう！～

2023 年度 入賞者作品集

2023 年度
読書推進プログラム
～読んで、感じて、伝えよう！～
入賞者作品集

もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
〔一等〕	
私たちはなぜ生きるのか、そしてどう生きるのか 溝田 岳生 (心理カウンセリング学科3年)	4
〔二等〕	
『つながりの精神病理』を読んで 志茂 大和 (心理カウンセリング学科3年)	7
韓国語から入る語学の世界	
須崎 ネオ (日本語・日本語教育学科4年)	10
〔佳作〕	
就職活動を通じた『希望の作り方』 石井 日菜 (心理カウンセリング学科3年)	14
『本日は、お日柄もよく』を読んで感じた言葉の力 渡邊 莉子 (韓国語学科3年)	17

作品は原文のまま掲載しています

受賞者一覧

【一等】

溝田 岳生 (心理カウンセリング学科3年)

【二等】

志茂 大和 (心理カウンセリング学科3年)

須崎 ネオ (日本語・日本語教育学科4年)

【佳作】

石井 日菜 (心理カウンセリング学科3年)

渡邊 莉子 (韓国語学科3年)

【参加賞】

14名

館長講評

本学図書館の恒例行事である読書推進プログラムは、毎年年末にかけて全学生諸君を対象として開催される大変重要なイベントである。本年度もまた多数の応募作品を迎えることができ、当イベントの定着と本学学生諸君の学力レベルの向上を期待させる結果となった。

評定については、本学図書委員会メンバーの全員が審査員となり、参加者名を伏した上で採点した得点集計の結果、昨年同様に上位3得点の中に3人の作品がひしめく混戦となった。

その結果、ヴィクトール・フランクルの歴史的名著『夜と霧』を題材とした「私たちはなぜ生きるのか、そしてどう生きるのか」を最高得点の第1位とし、これに僅差で続く「『つながりの精神病理』を読んで」ならびに「韓国語から学ぶ語学の世界」の両作品を2位とした。

また、佳作の2作品、すなわち「就活を通した『希望の作り方』」と「『本日はお日柄も良く』を読んで感じた言葉の力」について論じた両者は、上位3者に続く得点を獲得した良作であり、現代を生きる学生の自由な気風を大いに感じさせる作品であった。

なお、本年度は審査員特別賞に該当する作品がなかったとはいえ、全体として若い学徒のおおらかな気質を放つ作品が多く、好感もてる結果となった。ここに、優良なる作品を応募してくれた5名の入選者諸君の快挙を讃えとともに、今後も引き続き当イベントが盛況となることを願うものである。

新宿図書館長 石井貫太郎
社会学部地域社会学科・教授
法学博士

一等

私たちはなぜ生きるのか、そしてどう生きるのか

心理カウンセリング学科3年

溝田岳生

『夜と霧』みすず書房

ヴィクトール・E・フランクル著

「人生に意味はなく、人生が問いかけてくる問いにこそ意味がある。」

これは私が『夜と霧』を読んで最初に感じた感想です。

私たちは物事、ことさら人生においては、その意味を考える傾向にあります。

「今やっていることに何の意味があるのか?」「今やっていることが将来何の役に立つのか?」といったように。そうして物事の意味を突き詰めることで、私たちは人生のライフイベントから日々の作業に至るまで、モチベーションを失わず継続し続けられるという側面があります。一方で、全く意味のない単純作業のような事柄には意義を見出せず、中々取り組むことができないというのも私たちの性質でもあります。その一例として、「囚人の穴掘り」という有名な話があります。一昔前のヨーロッパでは、囚人に穴を掘らせては看守が埋め、また掘らせては埋める行為を延々と続ける刑罰「囚人の穴掘り刑」があったとされています。囚人は自分の労働の成果を看守に否定されることで、作業自体に意味を見出すことができず、最終的には精神に異常をきたしてしまったそうです。このように私たちが人生に張り合いを持って生きるためには「意味」が不可欠な要素であることは明らかです。

では、理不尽な理由から全く意味のない環境に置かれた際に、私たちはどう生きれば良いのでしょうか。そのような根源的な問いを『夜と霧』を教えてください。『夜と霧』は、心理学者であるヴィクトール・E・フランクルが、ユダヤ人の強制収容所に収監され、看守やあまつさえユダヤ人の同胞から理不尽な扱いを受ける様子を克明に記した書物になります。劣悪な環境に置かれたユダヤ人

は、ある者は栄養失調による飢餓から、ある者は流行り病から、ばたばたとその命を落としていきます。中でも深刻な「死因」は、生きる意味の喪失でした。希望の見えない、終わりの見えない収容所生活にユダヤ人は辟易し、精神的に脆く崩れ去ってしまいました。このような状況に彼は、心理学者として生きる意味についての問いを大きく転換させ、ユダヤ人の精神的治療に取り掛かります。

わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちから何を期待しているかが問題なのだ

生きることの意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの前に立っていることを思い知るべきなのだ

こうした彼の言葉には人生を生き抜くヒントがあるように感じます。

私たちは囚らずしも数多くのライフイベントに直面し、そのイベントの意味を考えます。そして、意味を考えるライフイベントは大抵自分にとって困難であり、容易に解決できない事柄ではないでしょうか。「就職活動で中々内定先が決まらない。」「周囲が着々と結婚する中、中々良い人が見つからない。」こうした辛い状況に陥った際、私たちはその「意味」を考えます。

私にとって物事の意味を最も考えた時は、高校3年生の受験期でした。コロナウイルスの流行と共に始まった受験は、夏前に甲状腺の病気が発覚し、一年の大半を身体の療養に充てることになりました。当然受験勉強は満足に行えず、自分が志望する大学に進学することは叶いませんでした。当時は病気と不甲斐ない自分を呪い、「なぜ高校3年生という大事な時期に病気になったのか」「なぜ他の受験生ではなく、自分が病気になったのか」という「意味」ばかり考えていました。

この状態は場面こそ異なりますが、強制収容所に収監されたユダヤ人と同じ状況だったと今に思います。自分にはどうすることもできない理由から、自分が直面した困難の意味をひたすらに考える、そんな状況です。しかし、多くの場合起きた物事に意味はなく、運命の巡り合わせにより生じることが大半だと若いな

がらに思います。究極的に言えば、私が受験期に病気になったことも、ユダヤ人がナチスにより強制収容所に収監されたことも「意味」はありません。「意味」を考えたところで、人間一人ができることなど、たかが知れています。私たちはただあるストーリーの一員に運命的に組み込まれただけなのです。

だからこそ、自分にとって辛い場面や困難を感じた時にこそ、意味を考えるのではなく、自分から物事に能動的に意味を与えていく必要があると思います。困難は、私たちに辛い状況下でどのような行動を取るのかを測るテストのようなものです。困難を目の前にし、辛い状況下から目を背けるのか、悩みながらも前を向いて進むのか、そういったことを問われていると思います。つまり人生の困難の意義は、困難を目の前にし、自分がどう振る舞うかということです。

強制収容所に収監されたユダヤ人は、収容所生活に絶望したものたちから命を落としていきました。一方で、収容所生活の中で自分の生きる意味を再定義したものは希望を見失わず、最後まで生き延びることができました。このことから考えると、収容所生活は生死の狭間に人間を置くことで、個人の生きる意味を問っていたのかもしれませんが。

私たちの人生は多くの困難に満ち溢れています。自分の思い通りにいかないこと、思いがけない不幸に見舞われること、そういった辛い現実が私たちを日々苦しめてきます。特に現代は不安定な世の中であり、今日の幸せが明日も続く保証はどこにもありません。そのような状況で、見つからない「意味」を探し、立ち止まってしまうことは簡単です。しかし、困難から自分ができることを考え、前に進むことも私たちにはできるのです。どちらか選べる人生であれば、自分の可能性を信じて、前に進む方が有意義な人生を送れるのではないのでしょうか。

なぜ生きるのかを知っている者は、どのように生きることに耐える

これは『夜と霧』内でヴィクトール・E・フランクルがニーチェの言葉を引用した一説です。困難から問われる「なぜ」を自分なりに解釈できれば、現実の「どのように」、つまり自分にとっての辛い現実を乗り越えることができるのです。

なぜなら「なぜ」を理解しているものは、自身で「どのように」に固執せず、別の観点から意味を創出できるからです。

二等

『つながりの精神病理』を読んで

心理カウンセリング学科3年

志茂大和

『つながりの精神病理』中井久夫コレクション 筑摩書房

中井久夫著

私は、中井久夫先生のコレクションより、「つながりの精神病理」、その中でも「老年期認知症の精神病理をめぐって」の内容に深い関心を覚えた。その理由は、認知症と言うものが、最近とても身近に思える出来事があったからだった。

私の祖父母は父方、母方共に近所に住んでいるのだが、日々の生活が忙しく、なかなか顔を見せに行けないことも多い。それでも年に数回は会うのだが、会う度に老いていく彼らを見るたびに、老いとはなんて残酷なのだろうと感じる。特に、認知機能においては、著しく悪くなってゆく。

母方の祖父母は、体はとても元気だ。祖父は定年後再雇用にて会社で働いている。そのおかげか、認知機能には問題がなく、体も丈夫だ。一方、祖母においては専業主婦であり、ここ最近では体力が落ち、趣味のスポーツ観戦なども辞めてしまったこともあり、認知機能が格段に落ちている。これはまさしく、人間が対人的評価や社会的評価を取り込む存在だからといえよう。

趣味があることで、他人との関わりが生まれ、対話をする。またそれを通し人生における楽しみや生き甲斐が生まれ、明日への活力となる。代わり映えのない日々を過ごしていることで、安定は得られるかもしれないが、精神的なエネルギーは補充されていかないのではないかと考える。

本の中では、引退した役人や熟練工を例にとり、下記のように記述されている。

「人間は、物質を、エネルギーを、エントロピーを、情報を取り込む存在で

あると医学部で教わるが、また対人的評価、家庭的・社会的評価を取り込む存在でもある。この欠如は、実際、大いに精神健康を損なうだけでなく、生物学的寿命にさえ関係する例は身近に見るとおりである。」

人間というものは会話をすることで、特に自分の成果を他人に見てもらおうことで、自分の評価を確認したい生き物なのだと思う。特に高齢者が昔の話を繰り返しよくするのは、その表れなのではないか、と本書を読んで思った。そう思うと、祖父母が話したことを忘れていたために何度も聞かされている話でも、知っているけどもう一度聞いてあげるか、という寛容な気持ちにもなれる。昨今の社会問題としてもあげられている通り、家族の在り方として、都会では核家族が一般的になってきている。それは個々人が独立して生活を営めるようになったという社会的な発展の面では良いことであり、二親等の親戚を含め他人に干渉されたくないという今の若者の感情を鑑みれば仕方のないことだが、そのような社会の在り方が、統合失調症ならびに老年期認知症の発症が目立つようになってきた一因なのではないかとも考える。

「私は何も認知症を無時間性、無答責性、無終末性への逃避という心因説を唱えるつもりはない。ただし、実際は統合失調症においても幅がある。どうしてもやはり統合失調症になったのではないかとおもわれる症例から、いくつかの不幸が重ならなければ失調を起こさなかったのではないかという症例まで、その幅は広い。不幸は多くダブル・パンチであって、心理的態勢を立て直す間のないうちに次の打撃が襲うという場合であるが、強いシングル・パンチもないではない。」

中井先生がこのように記述されている通り、発病のきっかけは人により、不幸が重なることで発病する場合も、普通の精神状態であればなんてことないことで発病してしまう可能性もあるのだと思う。発病するかしないかは、環境によるものが多いように思う。先述した通り、現在の核家族が多い状況では、もちろん我が家も例外ではないが、発病の環境的要因が多いように思う。精神的に傷ついたとき、癒せる存在がどれ程いるか、頼れる存在、自分を肯定してくれる存在がいるかはとても大切なことなのだと思う。

難しくはあるが、社会的繋がりを多く持つ人々が、疎外されていると感じやすい立場の祖父母の家などに定期的に顔をだし、対話をすることで、彼らはまだ社会的繋がりをもっていると感じることができるのではないかと感じた。

ここまでで環境的要因や発病のきっかけについて考えてきたが、最後に、本の中でも論じられている、統合失調症と老年期認知症の治療目的についても考えたいと思う。

統合失調症においては、病前の状態の復元を目指すものではなく、発病前に非常に不安定な状態であったものを、より余裕のある生き方になるようにするものである。一方、老年期認知症においては、「できるだけ豊かで無理のない人生をまっとうするように援助すること」と本書で書かれている。私はこの考え方がとても好きだ。この章の最後にある、

「一人ひとりが歴史の重みをもった個人であるのに、」

という一節に、全てが詰まっているように感じる。

痴呆の進んでしまった人々でさえ、若い時には日本を支える仕事人であったわけで、その人たちのお陰で今の日本の経済がある。それを思えば、尊敬の意を持って接することができ、治療方針も、より認知機能を改善することよりも、残された今後の人生をどうまっとうしていくか、どのくらい満足してもらえるか、そちらを考えていく方が大切なのではないかと思う。

私も現在心理学を学ぶ学生の一人である。どの分野に興味があり、進んでいくか、自分でも模索している最中であるが、もし老年期認知症の方々と関わる機会があれば、このような考え方を持って、接していきたいと思う。

二等

韓国語から入る語学の世界

日本語・日本語教育学科4年

須崎ネオ

『韓国語をいかに学ぶか 日本語話者のために』平凡社

野間秀樹著

韓国語で、お手洗いのことを「ファジャンシル」という。少し変わった響きに聞こえて、語源がずっと気になっていた。その後のあるとき、韓国映画を見ていたら、字幕に「化粧」という語が含まれていて、役者が「ファジャン」と言ったのが聞き取れた。その瞬間、「ファジャンシル」は「化粧室」という漢語だとわかったのだ。些細なことだが、これが私が韓国語の面白さに気づいたきっかけだ。

書名を一見すると、この本は韓国語の入門書のように思えるかもしれないが、実用的な文法事項が羅列されているわけではない。これは、「韓国語をいかに学ぶか」という問いを通して、韓国語に限らず語学で得られる知的喜びの世界へ入る本である。

著者は、構造的にも思想的にも、日本語に最も近い言語は韓国語だと断言している。そして、それら文法や語彙の著しい共通点は、韓国語を学ぶ上で大きく役に立つうえ、細かな相違点があればそれを観察するのもまた楽しいと述べており、強く同意できる。

序盤では、初学者にとって壁となるハングルについて、いかにシステムチックで分かりやすい文字であるかを解説している。全く分からない文字だからと恐れて韓国語を始めるのをためらっている人も多いが、この親切な解説を読めば、その抵抗感がいくらか軽減されると思う。

語彙の共通点では、もちろん漢語に顕著である。たとえば、「会」はフェ、「社」はサと発音することを学べば、「会社」はフェサ、「社会」はサフェと連想できる。他にも、冒頭で挙げた「室」⇔「シル」のように、日本語で「ち」「つ」で終わ

っている漢字は、韓国語ではほとんど1で終わっている。こういった音の対応さえ知っていれば、日本語の漢語をそのまま韓国語音に置き換えるだけで、正しい語彙を作れてしまったりする。間違っているけど、正しく覚え直せばより記憶の定着につながるから喜ばないと著者は記している (p.104)。

文法は、語順だけでなく助詞まで近く、逐語訳してそのまま文にできる場合も珍しくない。つまり、考える順番が日本語と同じということであり、SVO 語順や後置修飾型の言語を普段学んでいる私にとっては、ありがたみの分かる話である。

相違点も挙げておこう。たとえば、日本語は「天気がいい」「いい天気だ」のどちらも言えるが、なぜか後者がよく使われる。逆に、韓国語では前者の表現が好まれ、名詞志向の日本語と比べて動詞・形容詞志向的だという (p.192)。似ているところが多いからこそ、このような小さな違いから言語を見ることが楽しくなる。

語学の楽しさ・意義のひとつは、このような異文化との発想の違いがわかることだ。言語とはひとつの文化であり、世界である。自分を形作っている母語とは全く別の言語を学ぶことで、違う世界に入り違う発想を得ることができるのである。だから、アラビア語やフィリピン語など、文法も音も大きく隔たりのある言語ならもちろん、逆に韓国語のように日本語と極めて似ている言語なら、「全く違う言語なのにこんなに発想が近いのか」と感心できる。

p.219からは、教室における語学の実践法を論じている。この中で目を引いたのは、「先生が長々と日本語で話していたら、それを頭の中で同時通訳してみる」ことだ。これなら話すときの練習になるし、集中力も途切れない。ちなみに、私が個人的に実践してきたのは、「先生がネイティブなら、どんなこともできるだけその言語で話すこと」である。話すために言語を学んでいて、その母語話者が目の前にいるのなら、話さない理由がない。「これはなんといいですか」「少し離席します」などの授業中の一言から、授業後の雑談にいたるまで、その言語で言えること・言えそうなことは何でも試してみる。通じれば嬉しいし、通じずに訂正されたら、その表現は絶対に忘れなくなる。

p.249 からは、著者は言語道具観に苦言を呈している。言語は確かに使ってこそだし、私も話す場を夢見て学んでいる。しかし、上述したように、学ぶこと・過程そのものにも大きな意義があって楽しめるのだから、言語を意思疎通の道具としか見なさないのではもったいない。私もかつて、英語を単なる受験科目の一つとして捉えていた。しかし、好きな映画の台詞を、原語の英語ではどう言っているのだろうと気にするようになってからその面白さに気づき、上達していった経験がある。楽しさ、ひいてはモチベーションは、語学に最も大きな影響を与えるものである。話は逸れるが、大学の第二外国語を、「役に立ちそうだから」という理由で選ぶ人が多いように思う。しかし、時間数や人数の関係で、授業だけでは実用スキルとして習得することは難しいだろうし、そもそも英語以外は大きく役に立たない。だから、新たな言語文化に触れて自らの価値観を更新する機会だととらえて、純粹に面白そうだと思った言語を選べばいい。

ここで、語学が好きな人間として心に置いておきたい文を引用する。

「非母語とは自らにこれから在り得る言語であると同時に、非母語とは、何らかの外的条件が与えられれば、あるいは私の母語となっていたかもしれない言語なのである。私たちはなぜか他者の言語を希求する。それはきっと、他者の言語が、自らの言語であったかもしれないからだ。」(p.258)

私は、「この言語を母語とする人は、何をどのように考えるのだろうか？」と常に意識しながら言語を学んでいる。そうすれば、より新しい感覚を理解しやすくなるし、その言語の話者ともっと心を通わせられるからだ。外国語を学ぶことは人生を豊かにし、そしてその話者と話すことは、お互いに幸福をもたらすと私は信じて疑わない。

語学の世界への入り口は、何語であってもいい。難しい言語や日本語とかけ離れた言語もまた、それぞれの面白さがある。しかし韓国語なら、文法・語彙・発想の近さから、日本語話者にとってより簡単に、面白くなることが間違いないと思わせてくれる本である。韓国語を学びたい人や学んでいる人だけでなく、言葉に

少しでも興味のある人は、ぜひこの本を読んで、素晴らしい語学の世界へ足を踏み入れてほしい。

佳作

就職活動を通じた『希望のつくり方』

心理カウンセリング学科3年

石井日菜

『希望のつくり方』岩波書店

玄田有史著

希望という言葉聞いてどのようなことを思い浮かべるだろうか。私はまずこの本のタイトルを最初に見た時、希望をつくるという日本語の不自然さを感じた。「希望」という単語と「つくる」という動詞はなかなか一緒に使われることがないように感じる。

希望といわれると、実現したいと考える明るい事柄、夢などを思い浮かべるだろう。

新明解国語辞典 第七版によると、希望とは「自分がこう成りたい、人にこうしてもらいたいとよりよい状態を期待し、その実現を願うこと。また、その事柄。」である。使うとするならば希望をする、希望をきく、希望を見失うといった使い方をする。

さらに、進学や就職の面接時やグループディスカッションなどでもよく聞かれる質問の一つである。このように希望の有無は聞かれても、希望のつくり方は聞かれることはない。そのため、希望のつくり方と言われても全くイメージがつかない。

では、希望のつくり方とは具体的にどのようなものなのか。

著者は希望のつくり方に先立ち、希望学について「希望学の正式名称は希望の社会科学である。」と述べている。つまり、社会の中の希望について科学的に研究する学問であると私は考える。科学的に分析を行うという観点では私自身が学ぶ、心理学とも似ているように感じる。

その希望学で対象とする、希望とは四本の柱から成り立つ「行動によって何

かを実現しようとする気持ち」である。四本の柱とは「気持ち」「何か」「実現」「行動」である。「今、希望が持てないと感じている人は、四本の柱のどれかが見つかっていないのかもしれない。」と著者は述べている。

この四本の柱について読んだ時に、現在の自身の状況では就職活動が当てはまると考えた。まず必要であるとされている、「気持ち」がなければ具体的にこうなって欲しいという「何か」もない。そのため、「実現」も「行動」もない。特に私自身にとっての大切な「何か」が不足しているからである。

著者は、「子どもや若者は本来、素直に希望を語りやすいものです。それが大人になるにつれて、実現可能性についての情報を持つようになります。すると希望なんてどうせ叶わないという諦めも生じやすくなる。」と述べている。

大学3年生の今、私は就職活動に追われている。先述したようにグループワークや面接エントリーシートを書く機会や自己分析、自己PRを行うことが多くある。小学生や幼稚園・保育園といった子どもの頃には将来の希望を簡単に答えることができた。しかし、現在は企業などにウケの良い、希望を絞り出し、なんとかして当てはめようとしている。

このように本書を通して、自身の希望について考えたときに、どうせ叶わないと思い失望や絶望をしたくないという逃げにより、希望を持つことを諦めているといった部分もあることに気がついた。

なぜこのように、希望を失ってしまったのだろうか。その理由の一つとして、納得したものが、「気楽なひとことが、かえって希望を失わせることもあるのです。」という著者の言葉である。本書で例として取り上げられているのは「頑張れ」という言葉についてである。この言葉は近年禁句という認識が広がっている。もちろん使いようによっては励ましの言葉にもなるが、私はこの言葉を目標への道のりの中でゴールが目前の人にのみ使うべきだと考える。そのため、それ以外の人に対しては頑張れという言葉は、よく考えてから使うべきである。

この就職活動期間で、私は明確な目標や、やりたいことが見つけられていない。そんな時にかけられた、「とりあえずがんばれ」という言葉は、励ましどころかさらなるネガティブな気持ちへ向かうきっかけとなった。頑張っていない

からダメである。何を頑張ればいいのかわからない。そういった感情が渦巻いた。こうして私は希望を失ったのではないだろうか。

しかし、私は本書を通して再度希望を見出すことができると感じた。著者は以下のように述べている。

人はどんなに不確実な将来であっても、そこに一筋の光明さえ見出せれば、挑戦すべき対象として希望を持つことができます。また、先行きがある程度わかってしまったとしても、依然としてまだみえていない何かを期待できるとすれば、希望は持てるのです。

希望は失望に変わったとしても、探し続けることこそほんとうの意味がある。希望の多くは簡単に実現しません。大事なのは失望した後に辛かった経験を踏まえて、次の新しい希望へと柔軟に修正させていくことです。

つまり、この決められていない状況こそが希望の源である。また、この希望の修正によってやりがいに出会えるのならば、「頑張れ」という言葉で失望したことも、この決められずに悩んでいる状況も、たとえ努力が報われなかったとしても、新しい希望への第一歩であると考えよう。

希望とは与えられるものではなく、自分自身で作り出し見つけるものである。たとえ希望通りにいかななくてもその経験から学ぶことで新しい希望は生まれる。

希望の作り方とは自分自身を振り返ることである。たとえ無駄であると思えるようなことでも振り返ってみると無駄のことではないのである。この就職活動の中で自分自身を振り返り、他者と関わることで、私自身の希望を作り出し、見つけたい。

佳作

『今日は、お日柄もよく』を読んで感じた言葉の力

韓国語学科 3年

渡邊莉子

『今日は、お日柄もよく』 徳間書店

原田マハ著

『今日は、お日柄もよく』、お祝いの場で使われそうな言葉だと思った。

私はこの本を父から勧められた。読みやすいため、読書に抵抗のある私でも読み進めていけるのではないかと父は言った。その言葉と『今日は、お日柄もよく』というタイトルから本書に興味を持った。その後、インターネットで本書を検索し、読者のレビューをいくつか読んだ。その中には、言葉の力に気づいたという趣旨のレビューが数多くあった。私は、韓国語学科に所属していて日々言語つまり言葉に触れ、考えている。そのため、「言葉」という音に敏感なところがある。レビューを読み、本書は「言葉」に重点を置いているのだと知り、読んでみたいという気持ちがさらに高まった。そして、読み進めれば進めるほど「言葉」の大切さや力に改めて気づいた。したがって、本書の読書感想文を書きたいと考えるようになった。

まず、本書のあらすじを紹介する。主人公は 20 代後半の OL、二ノ宮こと葉だ。物語は、こと葉が幼馴染である今川厚志の結婚式に参列し、そこで伝説のスピーチライター、久遠久美に出会うところから始まる。こと葉は久遠久美がスピーチライターであることを知らずに、幼馴染の結婚式披露宴で久遠久美のスピーチを聞くが、そのスピーチに感銘を受け、会場が久遠久美のスピーチによって一体化したと感じた。その後、久遠久美がスピーチライターであること、そしてスピーチライターという仕事は何かということを知り、久遠久美に相談をするために再び会う。久遠久美と関わっていく中でこと葉は言葉、スピーチの力に魅了されていく。そして、最後には野党である民衆党のスピーチライターの一人に

なっていくという内容だ。

次に、印象的な場面と言葉を三つ紹介する。

一つ目は、こと葉が初めてスピーチをする場面だ。親友である千華の結婚式でスピーチをすることになる。スピーチの中の言葉に千華からの手紙の内容があった。

結婚式のときに持つブーケを、ふたつ、作ってもらいました。そのうちのひとつを、こと葉に贈ります。

お式の当日に、花嫁のブーケを投げるんだけど・・・・・・実は、こと葉に確実にキャッチしてもらいたかったから。

次に幸せになってもらいたい、大切な人。それが、こと葉です。

いままで、ありがとう。これからも、よろしくね

この部分にとっても感動し、涙が流れた。こと葉が久遠久美に相談に行く理由は、この千華の結婚式披露宴でのスピーチを用意するためだった。親友である千華を強く思っていること葉の行動とこの手紙をこと葉に宛てた千華の二人の友情に感動せずにはいられなかった。そして、この場面が印象に残ったのにはもう一つ理由がある。それは、こと葉がスピーチの最後に泣いてしまうところだ。久遠久美からのスピーチの極意のひとつは、「決して、泣かないこと。」であった。この極意を守ることができなかつたことから、こと葉と千華の強い絆をより強く感じ、こと葉の初々しさを感じ取ることができた。

二つ目は、こと葉が尊敬していながらもどこか鼻につくと感じていて、ライバル意識も持っている和田日間足の言葉を取り上げる。

聞くことは、話すことよりもずっとエネルギーがいる。だけどその分、話すための勇気を得られるんだ、と思います

この言葉を読んで、深いと感じた。多くの人は、聞くことよりも話すことにエネ

ルギーが必要だと思っているだろう。わたしもその中の一人であった。しかし、この言葉はその逆を言っていて、この言葉が真実のように思えてならなかった。そして、先日、日本語表現演習Ⅱの授業で先生がおっしゃっていたことが思い出された。話すことよりも聞くことの方が難しい。話し上手な人は多いが、聞き上手な人はなかなかいないという内容だった。上にある言葉は私の頭の中でこの先生の言葉と重なる部分があった。この二つの言葉から私が考えたことは、ただ聞くのではなく、耳を傾けて真剣に話を聞くことは簡単なことではない。真剣に耳を傾けて聞いていくことで話し手の状況や気持ち、伝えたいことを理解し、受け止めることができる。そして、そこで得た様々な考えが自分の視野を広げ、自分の経験となり、自分の言葉に自信を持つことができるようになる、ということだ。これから多くの場面で様々な人の言葉を聞く場面があることが予想されるが、その一つ一つを真剣に聞いていきたいと思った。

三つ目は、最後の場面である、こと葉の結婚式で久遠久美がスピーチをする場面だ。その中の言葉が印象に残った。「愛せよ。人生において、よきものはそれだけである。」という言葉だ。この言葉はこと葉と久遠久美の出会いの場所でもある幼馴染の結婚式披露宴でも述べていたものだ。久遠久美にとって今川厚志とこと葉は非常に大切な存在であったことが物語を読み進めていく中で分かっていく。その二人にあえて同じ言葉を送ったことに心を打たれた。

最後に、本書を読んで感じたことを述べていく。本書を読む前に読者のレビューで見た通り、言葉の力と大切さを改めて感じた。言葉は、私の想像以上に人に多くのものを与えることができるのだと気づき、それと同時に「言葉」をさらに大切にしなければならないと強く思った。感情に左右され、きつい言い方をしたり、汚い言葉を使ったりすることもある。また、緊張する場面では、自分の言葉に自信を持ってないこともある。しかし、言葉を発する前に一度頭の中で考え、自分の言葉に責任を持ち、自信を持って言葉を発していけるようになりたい。そのためには、本書にあった聞く力が必要だ。聞く力を養っていくために、まずは様々な人の話に、精一杯耳を傾けていきたい。そして、話を聞くということによって経験を積み、視野を広げていきたい。

2023 年度図書委員

心理カウンセリング学科	小野寺 敦子
心理学研究科	奈良 雅之
人間福祉学科（生涯福祉研究科）	六波羅 詩朗
子ども学科	山中 智省
児童教育学科	小宮山 郁子
メディア学科	原 克彦
社会情報学科	内田 康人
地域社会学科（国際交流研究科）	石井 貫太郎
経営学科（経営学研究科）	竹内 進
英米語学科	石原 健
中国語学科（言語文化研究科）	胎中 千鶴
韓国語学科	曹 永宝
日本語・日本語教育学科	鈴木 美穂
歯科衛生学科	佐藤 昌史
製菓学科	小田 耕三
ビジネス社会学科	大塚 敬義
新宿図書館館長	石井 貫太郎

2024 年 1 月 19 日発行

編集・発行 目白大学新宿図書館